

「全少」を日本一研究する指導者による提案

ZENSHOに 挑戦しよう！



養正館館長・渡辺貴斗 第36回



全少向け形指導のコツ (その3) 脱線することの素晴らしさ

★大勢の選手をどうやって指導しているのか？

養正館には、大きな大会に出るような、小1～中3の形選手が現在67名います。よく若手の先生方に「このような大勢の選手をどうやって一人で指導しているのですか？」と質問されます。つまり一人ずつ指導しているのか、全体練習なのか、といったことでしょう。養正館の形強化練習は99%全体練習です。大きな大会の2～3日前に一回くらいは一人ずつ見ることもありますが、普段の稽古で一人ずつ時間をとることは物理的にできません。よって、いつも全員が同じ練習をします。

まず、6人程度の班を11ほど作り、各班に「1年、2年、3年、4年、5年、6年、中学生」が均等に配分されるようにグループ分けします。新1年生は、練習について来られない子がいますので、リーダーである上級生がマンツーマンで指導します。このやり方で67名全員が理解し、一緒に前進していくことができます。

一人ひとりに指導する時間はありませんので、全体練習の中で、順番にいろいろな子に見本をやってもらって、その場で修正点をみんなで研究し、その子の修正点も直していきます。一人の弱点は、他の選手の弱点でもあることが多いからです。このようにして、個々の形を見る場としています。このやり方で、毎年多くの子供たちが全少、全日本錬成大会などで上位の結果を残しています。

★脱線と笑いが絶えない稽古

私は、15年前は、全少どころか、県大会（全少予選会）でも1勝もさせてあげることができず、常にイライラしながら稽古していました。しかしながら、今では、私本人も楽しみながら指導しています。

一生懸命話を聞いている子に話しかけたりして邪魔する子は叱りますが、自分一人で勝手に話を聞いていないような子には、叱らずにみんなで「笑い」にしています。養正館の形強化練習は、いつも笑いが絶えず、見学に来たママさん達もよく大笑いしています。1回の強化練習は、3時間程おこないますので、小学1年生などはそのような長時間の練習に耐えられません。よって、ときどき脱線したり、冗談を言ったりしてみんなで笑いながら稽古することで、退屈そうにしている子がいなくなり、私の冗談を聞き逃すまいと常によく話を聞いてくれるようになりました。カリスマ塾講師の授業テクニックを教えてもらったことがあります、実はそこからヒントを得ています。

まず、お笑いでいうところの「つかみ」で、初めに興味を引く話から始めます。全員こちらに興味を示したところで、子供たちに気付かれないように、うまくその日に稽古で取り上げたい内容の説明にスライド（移行）していきます。この方法ですと、小さな幼稚園の子でも長時間の話について来ることができます。

★寄り道することの大切さ

私の稽古は必要があれば、突然、角度を教える算数の授業になったり、学校の国語のテストの攻略法など、どんどん脱線していきます。しかし、あとで全てがつながり、子供たちの知識の世界はひとまわり大きなものになっていきます。

7年前のある日、素晴らしい本に出会いました。『奇跡の教室：エチ先生と『銀の匙』の子どもたち：伝説の灘校国語教師・橋本武の流儀』（小学館 2010年）伊藤氏貴著です。橋本先生の指導レベルと私のそれとは比較にもなりません、「指導法がよく似ている」とそのとき感じました。

ここに出てくる橋本武先生は、中学3年間、国語教科書を使わず文庫本『銀の匙』1冊で授業をするという、灘校の名物先生です（2013年、101歳で他界）。先生は、当時うだつの上がない灘校を全国一の進学校に育てあげました。横道にそれながら中学3年間かけて一冊読み込んでいく、分からない単語があれば、みんなで調べて、さらに横道にそれていく。一つの言葉からその背後に広がる大きな世界へとさらに発展させていく授業です。物事を徹底して掘り下げて考えること、遊びの感覚で寄り道することの大切さを教えてくれます。

★自立して自分で考える「生きる力」

橋本先生の授業のように、困った時に自分で答えを見出していける方法を、子供たちに教えておきたいのです。バッサイ大で私が教えた技術を使って、チャタンヤラクーサンクーを自分で研究する、そう

いったことができるようになると嬉しいですね。手掛かりはいろいろなところにあります。それに気づいてブレイクスルーしていける「生きる力」「考える力」が必要です。

自立して自分で考え、自分で問題解決できるようにすることが、指導の本質であると考えます。口を開けてエサを待つヒナのように、指導してもらっているだけでは一流にはなれませんね。つまり、いかに早く「親離れ」ならぬ「指導者離れ」できるかが、一流選手になるための必須条件であると考えます。

注：橋本 武（1912年-2013年）日本の国語教師・国文学者。元灘校（灘中学校・高等学校）教頭。京都府宮津市出身。1934年 神戸市の旧制灘中学校に国語教師として赴任。1950年、新制灘中学校で新入生を担当することになった時点から、「教科書を使わず、中学の3年間をかけて中助の『銀の匙』を1冊読み上げる」国語授業を開始する。

PROFILE

■渡辺貴斗 TAKATO WATANABE

1968年4月20日生まれ。7歳から父である館長から空手の手ほどきを受ける。児童心理学や成功哲学を研究して子どもたちの「心をつくる」指導法に切り替え、2013年全少5名入賞、2014年・2015年と2年連続で7名入賞、2016年5名入賞、2017年9名入賞させ、全国最多入賞数の記録更新中。道場経営でも、一道場で350名を超える大躍進を続ける。



日本空手道鴻志会空手道場養正館／静岡県沼津市本田町 11-12



どうやって道場生 350名に増やしたか？ その8

●チラシ作成7「配布頻度と範囲」

チラシはどの程度の範囲に、何枚を、何回配布したら良いのでしょうか？ それには、大きく次の二つの考え方があります。

1つは、まだ道場を知らない隣接する市町村の人たちにも広く知らせたい、きつとうちの道場を知ってくれば遠くからでも来てくれるはずだ、という考え方です。隣の市にも、空手を習いたいが、どこに道場があるのか知らない人が大勢いるはずです。

もうひとつの考え方は、とにかく道場に近いところに住んでいる人に知らせたい、近隣にすき間なくチラシを配布して、しかも年何回も配って、道場までの送迎の負担が少ない近隣から大勢来て欲しい、という考え方です。

どちらも正しいのですが、順番があり、それを間違えると大き

な経済的損失を生み出します。道場生の少ない道場は、まず、近隣にすき間なく年数回しつこく配布することをお勧めします。私がこのようにアドバイスしても、一回配布しただけで、「チラシなんか撒いたって、一人も来なかったじゃないか！」とすぐに諦めてしまう先生がいますが、同じ内容でいいので、我慢して同じ地域に少なくとも3回は配布して欲しいのです。TVコマーシャルも何度も見ているとだんだん欲しくなってきます。始めのうちは、初めて見るチラシを批判的に敵対視していますが、何度も何度も目に触れていると、だんだん親近感がわいてきます。これを「ザイアンスの単純接触効果」といいます。

近隣地域の子供たちが飽和状態になってきたら、ドーナツ状にチラシ配布を広げていくと、コストの無駄がなく健全な道場経営ができることでしょう。